

招 聘 研 究 員

氏 名	KIM, Sung-Eun
所属機関等	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科
受入期間	2019年1月21日～2019年1月31日
指導教員	佐野賢治
研究課題	後期李氏朝鮮及び江戸時代における日朝間の仏僧の往来



経典と教義を越えた仏教 —非文字研究資料としての朝鮮高僧碑石

Kim, Sung-Eun

はじめに

2019年1月、神奈川大学で研究発表を行った際、私は民間仏教の専門家として高名な日本のある研究者から質問を受けた。発表で私が論じていたのは、通常は文字資料である朝鮮王朝実録のような公式の歴史記録が、朝鮮仏教のことを、衰退して民間信仰になったものとして描いているという点であった。この点について私は、甘露嶺のような資料、特に高僧碑石など非文字資料と分類され得る資料を根拠に、朝鮮時代の仏教は衰退していなかったとの結論を導き出した。さらに、朝鮮時代の仏教が自立的で制度化された宗教として確立されていたことを示すことができた。

しかし、このとき私に投げかけられた質問には、より興味深い指摘が含まれていた。質問は「碑石が非文字資料とはどういうことか？」というものであった。意味は明らかである。すなわち、碑文が刻まれた資料を使う場合、主に使われるのは文字情報であり、したがって文字資料と変わりはないということである。この質問によって私は碑石についてより深く考えることになり、文字資料の多次元性という特質に行きつくようになった。ある資料に碑文が刻まれているからといって、その資料の非文字性が消されたり剥奪されたりするわけではない。文字が記されたり刻まれたりした物の、物質の次元を無視して、文章の次元にのみ注目するのはよくあることである。高僧碑石の場合、注目されるのは碑文のメッセージであることが多く、碑文が刻まれた石そのものは無視される。しかし私は、碑文の内容は非常に重要ではあるものの、高僧碑石の物質的側面も非文字資料として重要であることを論じていきたい。

まず、このアプローチの根拠を説明する。ある資料が非文字資料であるかどうかの特定は、その資料に文字が記されているかどうかに基づくべきではないと私は考える。むしろ、物としての側面が焦点となり得る。例えば陀羅尼は、そこに書かれた文の意味を伝えるために使われているわけではない。むしろ、言葉に内在する魔術的な力のために使われたり、儀式の中でその表音要素を一語一語発音することで力が発揮されたりする。陀羅尼は文字で表されているが、その使われ方と意義は書物とは全く違っている。書物は通常、学習を助ける手段として使われ、主に関心を集めるのは言葉の意味であるが、



●図1 普光寺甘露嶺





●図2 僧が儀式で聖歌をうたう（普光寺甘露幀）

このことは陀羅尼にはあてはまらない。

同様に、仏教の経典のような文字資料の場合も、文章自体の読解を含まない使い方をされることが少なくない。すなわち、文章に含まれる言葉の意味は、資料の非常に重要な部分でありながら、経典を取り扱う者たちによって使われてはいなかった。むしろ、儀式的な意味で使われたとき、そこに記された文字は、その資料が仏教の叡智を含んでいるということを示唆する意味合いの方が大きかった。そのように儀式で使われる場合、経典は儀式用品として認識され、使用され、そこに書かれている言葉は儀式上の意義を持っているが、それは語義的価値があるから重要なのではなく、儀式を遂行する点で重要なのである。

同様の例は朝鮮の近代以前の儀式でも見られ、そこでは経典が語義的価値ではなく、儀式遂行上の重要性和魔術的価値のために読まれていた。

普光寺甘露幀の中では、仏教の経典が儀式遂行の一部として読まれている。描かれている絵を見ると、経典を読解できるのはごく一部の僧侶であり、すべての僧侶が難解な経典を読んで理解できたわけではないと推測される。これらのケースは、碑石も経典と何ら変わらず、実際、経典と比べてときには読み物としての性格がさらに薄いことを示す例である。私は以下に、碑石がどのような意味で非文字資料としての価値を持っているかを論じていきたい。

ここでも、神奈川大学での発表と同じ結論に達することになる。すなわち、仏教は衰退したわけではなく制度化された宗教として確立されたということを、碑石を主な基礎資料として使うことによって明らかにすることができる、という結論である。



●図3 道岬寺 道誦國師 守眉禪師碑

朝鮮仏教の出現

高僧碑石の価値は、2世紀以上にわたる中断後の高僧碑石の建立が、文化的組織的活動の劇的出現を示唆していることにある。最初の碑石が建てられたのは朝鮮時代後期の1612年、壬辰戦争（1592–1598）終結のわずか14年後であった。

碑石の制作・建立の全過程を考察すると、碑文を刻む作業以外にも多くの段階があり、それぞれが碑石が建てられ始めた朝鮮時代後期の仏教とその組織について物語っていることがわかる。碑石の制作は決して小規模な事業ではなく、高度な組織的作業を遂行する能力と、様々

●表1 朝鮮時代の高僧碑石の時期別現況

Time (時期)	Number of Steles (碑石の数)
1392-1399	3
15世紀	1
16世紀	0
17世紀	51
18世紀	94
19世紀	47
20世紀	144





●図4 太古寺 圓證國師塔碑

な段階のリソースへのアクセスが必要であった。言い換えれば、碑石の制作には次の3段階のリソースが必要であった。1) 大衆から社会政治的エリートまで、様々な資金源から資金を調達する、2) 原材料を調達し、石材を運搬し組み立てる、3) 碑石に刻む文章の作者および書家として、優秀な学者や高位の役人の協力を得る。

ここで言えることは、社会関係資本、金銭的資本を含めて、これほど資本集約的かつ労働集約的な物を作るのに必要な組織的作業レベルを有しているということは、仏教社会が高度に組織化されており、自由に使える社会的、経済的リソースのみならず、政治的リソースまでも持っていたということである。例えば碑石の制作には、原材料の調達や石の長距離輸送などの物流作業を含む組織力が必要であったであろう。このことは石が他の地方で切り出され、行政区域を越えて運ばれたことを見ても明らかである。また、石を運搬するための労働力として兵士までもが動員されたことを示す記録も残っている。

さらに、碑石の制作と後援に社会政治的エリートたちが関与していたということは、朝鮮時代後期における朝鮮仏教の確立にエリートたちが決定的な役割を果たしていたことを示している。社会政治的エリートは、1) 碑石に記す文章の作者、2) 後援者、3) 仏教と碑文の内容を正当化する存在、として碑石の建立に不可欠なパートナーであった。

全般的な意味で、碑石の建立は、仏教社会の制度的、

経済的確立を正確に示す尺度となっていると思われる。なぜならそれは、歴史的タイミングにおいて、寺院の他の活動が盛んになったことと極めて密接に関連しているからである。ここで言う他の活動には、仏教儀式に関する書籍の印刷¹、修行僧教育課程の確立²、高僧の全集の発行³、17世紀の壬辰戦争直後に行われた寺院の改修⁴などが含まれる。

結論

朝鮮仏教について20世紀初頭まで常に言われてきたことは、朝鮮時代の仏教は当時の国による弾圧のため衰退したということである。仏教が生き残り、続いてきたのは、主に大衆の民間信仰になったからだとして一般に理解されているが、その説明が十分でないことはすでに証明されている。また、文官や知識人らが抑仏政策の考案者であり、加害者であったことは知られている。しかし、仏教を支持した大衆の重要性は軽視できないものの、社会政治的エリートたちが朝鮮仏教の出現に果たした役割は、おそらく従来考えられていたよりも大きいものであったであろう。

碑石の後援者であったことが示すとおり、社会政治的エリートたちによる仏教作品への支援と関与は、仏教文化への関与の不可欠な部分であり、それは朝鮮時代の仏教寺院が制度的・文化的に発展・拡大するうえで重要な要素であった。新たに出てきた朝鮮仏教に呼び名を付けるとすれば、朝鮮の社会政治的エリートの保護のもとで栄えた仏教という意味で、上流階級の仏教と表現できるかもしれない。

こうした結論に至ったのは、碑石に刻まれた文字の意味を理解した結果ではない。むしろ高僧碑石の物質的側面から引き出した、間接的読解と推測の結果である。言い換えれば、碑文の刻まれた石自体が、その表面に刻まれた文章よりもはるかに多くの情報を含んでいるのである。碑石には、巨大な石から作られる過程を通して、その碑石独自の歴史があり、それが朝鮮仏教と結びついていることは明らかである。その歴史を通して私たちは朝鮮仏教に関する情報を推論したり推測したりすることができるが、その情報は必ずしも碑石に刻まれた文字と関連しているとは限らない。

事実、宗教的な文章は必ずしも宗教の知識や過去の知恵を将来の世代に伝えるためのものではなかった。宗教的な文章には多くの目的が存在し得る。例えば単に信仰心を見せるための表現の形であることもあり、儀式で例えば魔術的な力を持つこともあり得る。書かれた言葉が聴衆の前で祭司によって読み上げられる際、その言語が聴衆の理解できないものであることも珍しくない。

このように、碑石には言葉を超えた意義があり、それ



【注】

- ### 【参考文献】

SON Seongpil. 16 segi sachalpan bulseo ganhang ui cheu 16 세
기 사찰판 불서 간행의 증대와 그 서지사적 의의 [A study on
the increased Buddhist publication in the sixteenth century
and the significance of its bibliographical history](16世紀に
おける仏教書出版の増加とその書誌学史上の意義に関する
研究). Seoji hak yeon-gu 54: 359-379. 2013.

YI Ganggeun. 17 segi buljeon ui jangeom e gwanhan yeon-gu
17 世紀 佛殿의 莊嚴에 관한 研究[A study on the
construction of main dharma halls in the 17th century](17 世
紀における大講堂の建立に関する研究). PhD Diss., Dongguk
University. 1994.

Buddhism Beyond Sūtras and Doctrine: Joseon Eminent Monk Steles as Non-Written Research Material

University of British Columbia Kim, Sung-Eun

However, the question that was posed to me during the presentation turned out to be the more interesting part. It was posed, “How are the steles non-written material?” The implication was obvious; when using such material with inscriptions, it was the written information that was mostly used and therefore no different from any other written material. This question made me reflect more deeply on the steles and led me to the quality of the multi-dimensionality of written materials. Because certain materials have inscriptions on them does not erase or disqualify the non-written aspect of the material. There is a tendency to ignore the material dimension on which the writing or inscription is done and only focus on the



literary dimension. In the case of the eminent monk steles, focus is often on the message of the inscriptions and the stone on which the engraving is made is ignored. However, although the content of the inscription is very important, I will discuss how the material aspect of the eminent monk stele is also significant as non-written material.

Firstly, I will explain some of the reasoning behind this approach. I believe that it is incumbent that qualifying materials as non-written should not be dependent on whether there is inscription on the material. Rather, the material aspect can be the focus. For example, *dhāraṇī*s are not used to convey the semantic meaning of the written *dhāraṇī*. Rather, they are used for the magical powers that are inherent in the words or activated by verbally uttering its phonetics in a ritual setting. Though the *dhāraṇī* is a written form, its use and significance is quite different from how literary compositions are normally used as a heuristic tool when the focus is mostly on the semantic significance.

In a similar way, in the case of written materials such as a Buddhist *sūtra*, there are many cases where its use does not include reading the literary meaning of the composition per se. In other words the semantic significance that is contained in the composition were not used by those who handled the *sūtra*, though a highly important part of the material. Rather, when used in a ritualistic sense, the writing on the medium was more an indication that the material at hand contained the wisdom of Buddhism. In such ritualistic use, the *sūtra* is perceived and used as an object of ritual, and the words that are contained in the pages of the *sūtra* have ritualistic significances that are important in the performative aspect, and not for its semantic value.

There are pre-modern examples in Korea where this was similarly true, and can be witnessed during rituals when *sūtras* were read for its performative and magical value and not for its semantic value.

Within the Bokwangsa sweet dew painting, Buddhist texts were being read as part of the performed ritual. As depicted in the painting, one would assume that the only people who were able to read and comprehend such reading of the *sūtra* where only a handful of monks, and even not all monks would have been able to read and comprehend such recondite meaning. Such cases provide examples of how steles can be no different from *sūtras*

and in fact are less literary objects when compared to *sūtra*. I will discuss below the ways in which the steles have value as non-written material.

As in my presentation at Kanagawa University, I will also come to the same conclusion that by using steles as the main source material, I am able to show that Buddhism did not degenerate but became an established institutionalized religion.

Emergence of Joseon Buddhism

The value of eminent monk steles is that the dramatic emergence of both cultural and institutional activity was indicated by the erection of eminent monk steles after a hiatus of over two centuries. The first stele was raised in the late Joseon period in 1612, just fourteen years after the culmination of the Imjin war (1592-1598).

When we consider the entire process of constructing and raising of steles, we are aware that other than the inscriptions, there are multiple levels of construction that tell us about Buddhism and its organizations during the latter Joseon period when the steles began to be erected. Stele construction was not at all a minor feat but involved the ability to execute high level organizational operations and, moreover, having access to various levels of resources. In other words, the construction of steles involved three levels of resources; 1) securing funds from sources ranging from the masses to the socio-political elites, 2) the procurement of the raw material, transportation and construction of the stele block, 3) enlisting prominent literati or high standing officials as the composers and calligraphers of the stele text.

The argument here is that the level of organizational operations needed to construct such capital and labor intensive product, including social and monetary capital, is reflective of the Buddhist institution as highly organized with social, economic, and even political resources at its disposal. For instance the construction of the stele would have involved organizational capabilities including logistical operations such as when procuring the raw material for the stele and transporting the stone over far distances. This was evident given that stones were quarried from other regions and transported between districts. In other cases, records indicate that soldiers were even involved as part of the labor in the transport of the stones.

Furthermore, the involvement of the socio-political



elites in the sponsorship and construction of the steles represent the crucial role of these elites in the establishment of Joseon Buddhism during the latter Joseon period. The socio-political elites were essential partners in the raising of the steles both as 1) the composers of the stele texts, 2) the sponsors, and 3) the legitimators of Buddhism and the claims made on the steles.

In the overall sense, the rise of the steles appear to be an accurate measure of the institutional and economic establishment of the monastic community as it correlates fairly closely in historical timing with the rise of other activities of temples. They include, printing of Buddhist ritual texts,¹ establishment of monastic curriculum,² publishing of collected works of eminent monks,³ and temple renovations that took place in the seventeenth century immediately after the Imjin war.⁴

Conclusions

The usual narrative of Joseon Buddhism up to early twentieth century has been that Buddhism during the Joseon period has degenerated due to the state oppression during that time. It is generally understood that the survival and continuation of Buddhism was largely by means of becoming a popular religion of the masses, which has been proven to be not the complete explanation. Moreover, the scholar-officials and the literati are known to be the architects and the perpetrators of the anti-Buddhist state policies 抑佛政策. However, without undermining the importance of the masses in supporting Buddhism, the role of the socio-political elites have perhaps played a greater role in the emergence of Joseon Buddhism than previously thought.

As the sponsorship for the stele indicates, patronage and participation in the Buddhist works by the socio-political elites was an integral part of participating in the Buddhic culture that was important in the development and extension, institutionally and culturally, of the Buddhist temples through the course of the Joseon period. If perhaps we were to name the newly emerged Joseon Buddhism, it may be characterized to be gentry Buddhism, a Buddhism that flourished under the tutelage of the Joseon social-political elites.

What has been concluded was not the result of comprehending the semantic significance of the inscriptions of the steles. Rather it was the result of the indirect reading and the conjectures that were drawn from the material aspect of the eminent monk steles. In other words, steles

with inscriptions on them contain much more information than the text that has been inscribed on the surfaces of the steles. Steles through its course of being constructed from a large piece of stone has its own history that is obviously connected with Joseon Buddhism. Through this history we are able to deduce and infer information about Joseon Buddhism that is not necessarily related to the inscriptions on the stele.

Indeed, religious texts have not always been for transmitting the spiritual knowledge and wisdom of the past to future generations. Religious texts can have many purposes such as a form of a simple display as a show of religious devotion or their use can be in rituals as objects of magical power. Often times written words are read out loud in front of an audience by the ritual officiant in a language that is not understood by the audience.

In this way, steles carry a significance that goes beyond words that tell us a story about Joseon Buddhism that is quite different from what scholars have read in the official histories of the Joseon dynasty. In some sense such stories of objects are more accurate than composed words as such compositions sometimes hold rhetorical intentions of the authors as it has been the case with the official histories. Thus while reading the written words of Buddhist material, it would be wise to also read, indirectly, its history and story.

[Notes]

- 1 Starting from the sixteenth century, the printing activities of temples increased dramatically. Between the reign of King Sukjong (r. 1674–1720) and King Cheongjo (r. 1776–1800), Buddhist ritual texts were printed extensively (Nam 2012, 15).
- 2 According to Son Seong pil, scriptural manuals for monastic education were widely published starting from the 16th century (Son Seong pil 2013).
- 3 It was during the 17th century that the collected works of eminent monks began to be printed, with the earliest known being the *Sameongdang daesa jip* 四溟堂大師集 in 1612, the collected works of master Sameong, one of the most renowned monk of the Joseon period. In the course of the seventeenth century the total number of 21 collected works were published, with another 21 published during the eighteenth century, while during the nineteenth century this number dropped to 13 works (Yi Jino 1990, 29–30).
- 4 Especially due to the destruction that temples experienced during the Imjin war, reconstruction projects abounded right after the war. See Yi Gang geun (1994, 47–48).

Bibliography:



Nam, Huisuk. 2012. "Publication of Buddhist Literary Texts: The Publication and Popularization of Mantra Collections and Buddhist Ritual Texts in the Late Chosŏn Dynasty." *Journal of Korean Religions* 3, no. 1: 9–27.

Son Seongpil. 2013. "16 segi sachalpan bulseo ganhang ui cheu" 16 세기 사찰판 불서 간행의 증대와 그 서지사적 의의 [A study on the increased Buddhist publication in the sixteenth century and the significance of its bibliographical history]. *Seoji hak yeon-gu* 54: 359-379.

Yi Ganggeun. 1994. "17 segi buljeon ui jangeom e gwanhan

yeon-gu" 17 世紀 佛殿의 莊嚴에 관한 研究 [A study on the construction of main dharma halls in the 17th century]. PhD Diss., Dongguk University.

Yi Jino. 1990. "Joseon hugi bulga hanmunhak-ui yubul gyoseop yangsang yeongu" 조선후기 불가한문학의 유불교섭 양상 연구 [A study of Confucian-Buddhist exchanges in the Buddhist classical literary Chinese during the late Joseon period]. PhD Diss., Hanguk jeongsin munhwa yeonguwon (Academy of Korean Studies).

